

第一回全国高校生社会イノベーション選手権

大会終了報告書



イノチャン

2018.8.18-8.19

東京大学大学院工学系研究科 社会基盤学専攻

(一社)日本社会イノベーションセンター (一社) i.school

目次

● 大会概要	3 - 4
● 一次審査について	5
● 本大会について	6 - 9
● 大会広報	10
● 審査員	11 - 12
● スポンサー	13
● 決算	14
● 大会参加者の感想	15 - 17
● 実行委員会の活動	18 - 21
● 来年度の開催に向けて	22
● 企画協力	22
● Special Thanks	22
● 最後に	23



大会概要

イノチャンとは

全国高校生社会イノベーション選手権（以下イノチャンと表記）は、イノベーションを学び実践する場を高校生に提供することを目的として設立された大会です。第一回大会には全国 11 チームから応募があり、そのうち一次審査を通過した 9 チームが 8 月 18 日（土）および 19 日（日）に東京大学武田ホールで開催された本大会に出場しました。本大会では「日常的にも災害時にも役に立つグッズを考える」をテーマに、主催側が設計したワークショップ（WS）に従ってアイデア発想に取り組みました。高校生にとっては普段の授業では扱わないような課題に悪戦苦闘する姿も見て取れましたが、どのチームも仲間と協力して最後には甲乙つけがたい素晴らしいアイデアを創出することができました。



本大会ワークショップでの議論の様子

主催・共催

当大会は東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻が主催し、一般社団法人日本社会イノベーションセンターおよび一般社団法人アイスクールが共催しています。

イノチャンコンセプト

「みなさんが社会を変える。イノチャンはその第一歩なのです。」

みなさんは何を目標に勉強しているのでしょうか。何を将来成し遂げたいと思っているのでしょうか。

私たちの思いはただひとつ。みなさんには将来的に、社会を変える人材になってほしいのです。社会を変えと言っても、ジョブスのように革新的な発明をせよと言っているのではありません。ちょっとしたアイデアでも人々の行動と価値観に影響を与え、生活を変える社会イノベーションを起こすことができるのです。

具体的な例として、2012年の Good Design 特別賞を受賞した「ヤタイ広場」は社会イノベーションであると言えます。これは、東日本大震災により市街地が壊滅した大槌町において、被災者が集まれる場所を「屋台のある広場」としてデザインした事例です。街の物理的な整備のみならず、人々の繋がりや人と土地との繋がりを通して復興に寄与した点が評価されています。大したことないじゃん、と思う人もいるかもしれませんが、行政機能が壊滅した地域において、復興に向けて歩み出すきっかけとなりました。素敵なことだと思いませんか？みなさんにはこうした社会イノベーションを、政府、民間、ベンチャー、大学、地方政府問わず生み出し、社会を変える主体になって欲しいのです。

ではどのように社会イノベーションを生み出せるのか。

イノベーションを生み出す力は一部の天才だけのものだと思いませんか。その力はジョブスにはあるが、自分にはない、と。しかし、イノベーションを生み出す力は「教育」によって鍛えることができるのです。そして、そんなイノベーション教育への入り口が「イノチャン」なのです。

イノチャンとは、高校生を対象として、社会課題を解決する社会イノベーションのアイデアと、その創出プロセスを競う全国大会です。イノベーション教育の第一人者によるワークショップや、同じ志を持った生徒との競争・交流を経て、その楽しさと奥深さに気づくと思います。

大会日程

- 5月14日(月) 9時00分 一次審査応募開始
- 6月11日(月) 18時00分 一次審査応募締め切り
- 7月9日(月) 15時00分 一次審査結果発表
- 8月18日(土) 本大会1日目
- 8月19日(日) 本大会2日目

一次審査について

一次審査テーマ

「新しい防災訓練を考える」

審査詳細

●応募期間

平成 30 年 5 月 14 日（月）9 時～平成 30 年 6 月 11 日（月）18 時

●応募資格

対象は高等学校・高等専門学校生徒とします。中等教育学校の場合は後期課程の生徒（4～6 年生）を対象とします。

1 チームの構成人数は 4～6 名とします。

同一都道府県内の場合、複数校による混成チームを認めますが、引率教員（代表）と各校責任教員、代表学生を必ず決めてください。なおこの場合、優勝または入賞した際には、トロフィーは引率教員の所属校に授与し、賞状はチーム構成員の所属校すべてに授与いたします。

本大会進出が決定したチームは一次審査応募時の登録メンバーを変更・追加することが可能です。変更可能な人数は 2 名までとし、またチーム構成人数が 6 名に満たない場合は、必要であれば不足分のメンバーの追加が認められます。

●応募方法

以下の 2 点を添付したメールを大会メールアドレス (innochan2018@gmail.com) まで送信

エントリーシート

一次審査テーマについて「見つけた課題とその分析」「課題を解決するためのアイデア」「どのような議論を行ったのかのプロセス」の 3 点についてまとめたもの（形式は自由）

●審査基準

現状分析・課題発見力

アイデアの発想プロセス

アイデアの新規性・実現可能性・社会的インパクト

本大会について

本大会の概要

本大会では「日常的にも災害時にも役に立つグッズを考える」をテーマに、主催側が設計したワークショップに基づいて各チームがアイデア発想に取り組みました。本大会は8月18日（土）および19日（日）に東京大学武田ホールで開催され、1日目は事前課題として高校生に「防災の課題」「普段から使っている日用品」について考えてきてもらったことを元にしたワークショップを、2日目は考えたグッズの最終発表を行いました。なお最終発表で各チームにはグッズの説明と共に、使用するシーンについてのスキット（寸劇）で自分たちのアイデアを伝えてもらいました。



本大会ワークショップの様子



大会テーマ発表の様子

本大会参加チーム

チーム名	高校名	構成人数	
		男子	女子
愛光 B	愛光高校	6	0
市学	市川高校	0	5
カズちゃんズ	今治西高校	4	0
チームかしわざき	柏崎翔洋中等教育学校	2	4
銭形レスキューファイブ	観音寺第一高校	3	1
南海キャンパサーズ	観音寺第一高校	2	3
TOFU arch 13th	東京工業大学附属科学技術高等学校	3	3
seventeeeee	広島高校	0	4
凌雲の志	広島高校	1	4

本大会タイムテーブル

● 1 日目

12:00 ~ 12:50	開会式
12:50 ~ 18:00	本大会 WS
18:00 ~ 20:00	懇親会

● 2 日目

9:00 ~ 9:45	最終発表準備
9:45 ~ 12:25	最終発表
12:25 ~ 13:50	昼休憩
13:50 ~ 15:00	結果発表・閉会式

本大会 WS の概要

1. 防災の課題を考える

各自が事前課題で考えた「防災の課題」をチーム内で共有し、重要なものを5つ選択する。

2. 日用品について考える

各自が事前課題で考えた「普段から使っている日用品」について紹介し、チームメンバーがその日用品との出会いやその日用品を持つ理由について質問する。

3. 普段から使いたくなる防災用品のアイデアを考える

これまでに考えた防災の課題と日用品を持つ理由を組み合わせることで、普段から使いたくなるような防災グッズについて各自考える。

4. アイデアの共有・評価・選択・改善

各自が考えたアイデアを共有し、チームメンバーや先生からのフィードバックをもとにアイデアを1つに絞り、そのアイデアを改善していく。

アイデアの評価基準

●新規性

既存の事例にとらわれない、斬新なアイデアであるか

●防災グッズとしての有用性

実際に問題となっており、かつ影響力の高い防災の課題を解決できるアイデアになっているか

●日用品としての魅力

日用品として普段から使いたいと思うアイデアになっているか

●実現可能性

アイデアを実装する際に生じる障壁が存在するか、存在する場合は障壁を適切に把握しているか

優勝

凌雲の志（広島高校）「ABILITY BAND」

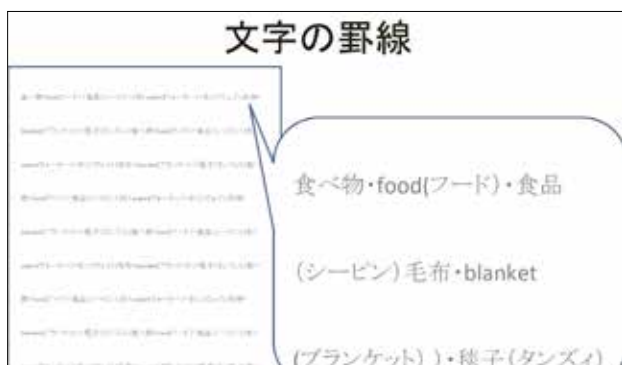
「ABILITY BAND」とは災害ボランティアを行う際、腕につけるバンドである。日常の中ではペンとして使用することができる。ボランティアの現場では、そのバンドの色は、身につけている人が協力できること、すなわち能力（例えば青は「人命救助」、桃は「多言語対応」など）を表すため、被災者に過不足ない的確な援助を提供することができる。これにより、ボランティアを行う人が何を行えばよいか分からず、被災者のニーズに応えられないというトラブルを回避することができる。



準優勝

カズちゃんズ（今治西高校）「手帳でコミュニケーション」

訪日外国人が増加している昨今、災害時に外国人とのコミュニケーションが不可欠となっているが、すべての人が相手の言語を話せるわけではない。この手帳は、罫線が文字に置き換えられており、災害時に避難所等で必要となる言葉の翻訳本（日本語→英語・中国語など）として用いることができる。また、この手帳を普段使いすることで、繰り返し文字が目に入り、自然と言葉を覚えるようになる効果も期待できる。



南海キャンバサーズ（観音寺第一高校）「とりはずシート」

このアイデアは、車の車内のシートを取り外し可能にし、災害時には避難所でイスやベッドとして使用できるようにすることで、避難所での生活を快適にするものである。



大会広報

大会ホームページ

大会ホームページにはイノチャンはどういう大会であるか、大会のコンセプトやイノベーションの事例、今大会における審査員の方のプロフィール、協賛していただいた企業様やクラウドファンディング支援者など、大会に関する情報を掲載しております。

<http://innochan.x0.com>



公式 Facebook

Facebook には主にイノチャンの大会についての情報提供を幅広く行っておりました。大会に関してのアナウンスや、学生が大会の準備をしている姿などがあげられております。

<https://www.facebook.com/イノチャン全国高校生社会イノベーション選手権-309000782839847/>



メディアへの広報

国土交通省の記者クラブと文部科学省の記者クラブにプレスリリースを提供しました。実際に大会当日には本田技研工業、NTT コミュニケーションズ、大成建設、i.school 事務局の方に見学にお越しいただき、教育新聞社の方には取材を受け記事にいただきました。

教育新聞社「防災の新アイデアを高校生が創出 全国選手権レポート」

<https://www.kyobun.co.jp/commentary/cu20180903/>



審査員



入江さやか

NHK 放送文化研究所メディア研究部上級研究員。1963 年東京生まれ。読売新聞社、米国・スタンフォード大学地震工学センターを経て、シリコンバレーのネットベンチャー企業に勤務。(株)日本総合研究所を経て 2000 年に日本放送協会 (NHK) 入局。報道局社会部や災害・気象センターなどで防災報道・災害報道にあたる。2014 年 6 月から現職。2015 年関東・東北豪雨、2016 年熊本地震など被災地での取材・調査に基づく災害情報・防災情報の研究に取り組んでいる。日本地震工学会理事、日本災害情報学会企画委員。



新屋千樹

1971 年生まれ。川崎市出身。専門は都市計画・都市整備。学生時代は土木工学科にて景観を専攻。大学院修了後、国土交通省にて、主として都市及び道路政策の企画・立案や各地の都市整備プロジェクトに携わる。東日本大震災の復興まちづくりでは、宮古市及び山田町の復興計画策定を支援するとともに、景観・都市空間形成のガイドライン策定に従事。現在は沼津市副市長。地方都市の戦略的まちづくりに取り組む。



堀井秀之

i.school エグゼクティブ・ディレクター。JSIC (日本社会イノベーションセンター) 代表理事。東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻教授。1980 年東京大学工学部土木工学科卒業、ノースウェスタン大学大学院修士課程・博士課程修了。専門は社会技術論、国際プロジェクト論、イノベーション教育論。2009 年 i.school を設立、エグゼクティブ・ディレクターとして、i.school 運営を統括する。2016 年 JSIC を設立、代表理事に就任。著書に「問題解決のための『社会技術』」(中公新書)、「社会技術論:問題解決のデザイン」(東京大学出版会)など。



小松崎俊作

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻講師。i.school アシスタント・ディレクター。東京大学工学部土木工学科を卒業後、ラトガース・ニュージャージー州立大学に約 4 年間留学し、政策科学・公共政策学を学んだ。研究面では分野横断的なバックグラウンドを活かして、特に社会イノベーション創出に貢献する公共政策の形成過程をテーマとしている。問題解決策(政策)の設計・実装という課題を意識して 2013 年度から i.school での活動に関与し、社会基盤学の学生・実務者はもちろん、海外や高校生も含めた幅広い対象にイノベーション教育を実践している。

審査員業務について

●事前準備

当大会のホームページに掲載する写真および紹介文の送付

当大会のホームページで公開する、審査員の方の写真と紹介文をお送りいただきました。

当日資料の通読

本大会の開催に先立ち、審査員の方に当日資料をお送りし、本大会当日の流れなどについてご確認いただきました。

●本大会当日

当日打ち合わせ（両日）

高校生のワークショップへの助言（一日目）

一日目のワークショップの際に、審査員の方には各チームを回っていただき、ワークショップについての助言をお願いしました。

懇親会（一日目・希望者のみ）

アイデアの評価およびコメントの記入（二日目）

審査員の方には各チームの最終発表を聞きながら、評価シートに評価および各チームに向けてのコメントを記入いただきました。

講評（二日目）

最終発表後、結果発表に移る前に最終発表を振り返ってのご講評をいただきました。

写真撮影および高校生からの質疑応答（二日目）

閉会后、審査員の方や高校生含め、当大会に関わった全ての人と記念撮影を行いました。また、審査員の方には、高校生からの質疑応答にお受けいただきました。

審査員アンケートの記入およびインタビュー（二日目）

来年度以降の当大会の運営の参考のために、審査員の方には審査員アンケートをご記入、およびインタビューをお受けいただきました。

スポンサー

当大会の開催・運営における必要資金は、企業様からの協賛金とクラウドファンディングによる収入から充てられています。金額の内訳は決算の項目で報告する通りです。皆様から多大なるご支援を賜りましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。

企業協賛

下記の5つの企業様よりご協賛をいただきました。

ジェットエイト株式会社 様

株式会社大林組 様

鹿島建設株式会社 様

大成建設株式会社 様

清水建設株式会社 様



大林組



鹿島



大成建設
For a Lively World

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

クラウドファンディング

また、当大会では Readyfor を通じたクラウドファンディングを実施しました。

大城秀彰 様

水井研治 様

横田幸信 様

上記と他合わせて 29 名の方にご支援いただきました。

決算報告

収入

摘要	金額 (円)
大成建設株式会社 寄付金 (非課税)	240,000
清水建設株式会社 協賛金	240,000
(株) 大林組 協賛金 (8万円×3口) (非課税)	240,000
鹿島建設株式会社 広告掲載料	240,000
ジェットエイト株式会社 協賛広告費	320,000
クラウドファンディング (Readyfor)	240,022
計	1,520,022

支出

摘要	金額 (円)
武田ホール使用料	209,000
当日飲食代	229,071
審査員謝礼・交通費など	56,970
大会トロフィー・賞状など	61,877
大会広報費	102,840
その他当日使用物品費	75,148
その他経費	62,008
計	834,003

第一回大会の収支差額は 686,019 円です。大会資金は今後、大会で発表されたアイデアの具現化とそのサポート、イノベーション教育の継続や大会広報等に活用させていただき、大会の拡大・発展を目指します。今後の活動や発展については、随時ウェブサイトや SNS にて発信していく予定です。

大会参加者の感想

参加した高校生の感想

本大会終了後に参加者の皆様にアンケート調査を通して、本大会へのご感想・ご意見をいただきましたのでその一部を抜粋してご報告いたします。

「最終的なアイデアを出すまでのステップ・過程に変化があった。これまでは1つの物事にとらえられてしまい、1つの視点からしか見れていなかったが、その1つについて多角的にとらえ、特徴を見出し、次につなげるという、確実なステップが身についたと思う。」

「今回のテーマは『防災』。今まで2度の大きな地震を経験した我々にとっては多少馴染みのあるものだった。普段何かを考える時は自分たちの視点からのみだったけど、今回はあまり接する機会のない西日本の人たちの考え、体験を知ることができて、新たな発見が数多くあった。また懇親会では他地域の現状、方言、学校のこと、街のこと、様々な話を聞くことができた。」

「この大会を通して初めてイノベーションに触れ、イノベーションに興味を持つようになった。この大会の予選がきっかけで、イノチャン以外のイノベーションにも参加するようになった。今回は『防災』というテーマで考えたが、今まで自分自身があまり意識したことのない事だったので、知って驚いた事も多かった。例えば東日本大震災の映像を事前課題のNHKアーカイブスで見た時に信じられないような事が目の前の映像で流れていた。その時初めて事の重大さに気がついた。本大会では優勝や準優勝することができなかったが、この大会を通して自分の頭で考えることの大切さ、自分の考えを相手に伝えることの難しさを知った。来年も参加できたらいいなと思う。」

「大会に参加するまで防災にあまり興味がなかったが、大会を通して、インターネットで調べたりワークショップに参加し、防災は他人事ではないと思うようになった。自分のこととして考え、日頃から意識するようにしないと、突然くる災害に対応しきれないと思った。また、実際に豪雨などの被害にあった高校生と話し、いつ自分もそうなるかわからないと感じた。」

「学校では『受験のための勉強』をやっているように思えてなぜ勉強するのか疑問を持ったり自分から学ぼうと思う意欲を失いがちですが、今回大会に参加して改めて自分が学ぶ意味や目的を確認できた気がします。受験のための勉強ではなく、もっと防災など社会の問題に目を向けて、受験後のことを考えながら学んでいこうと思えました。決められたものではなく自分が知りたい、学びたいものを追い求めてもいいんだなと感じました。また大会では防災について深く考えるきっかけにもなりました。」

審査員の方々の感想

審査員の方々から、大会終了後にインタビューを通してイノチャンへのご感想やイノベーション教育へのご意見をいただきました。その一部をここで紹介させていただきます。

入江さやか 様

「防災や災害の専門知識のない高校生にとって今回のようなテーマ（防災）でのイノベーションの検討は難しいとの声もあったが、全くそんなことはなく、長年防災に関わる私自身にとっても新たな発見や気づきがあり、高校生にとっても私自身にとってもイノチャンはとても意義のある場であった。」

「イノベーションというのは高校生にとって、自分たちが社会や地域の中でどのように生きていくのか、何ができるのか、そして社会や地域をどのように変えていくのかを考えるすごく良い機会になる。」

新屋千樹 様

「実生活での経験と机上での勉強、その両方を見ながらやっていくという姿勢を若いうちから持っていくことは非常に重要。そういう意味でイノチャンで高校生の皆さんは良い経験をされたと思う。」

「何かクリエイティブなことをした際は、必ずそれを発表しないと意味がない。それを高校生のみなさんは短い時間内にしっかりとまとめてきたところが非常に素晴らしかった。プレゼンが非常に面白かった。」

堀井秀之 様

「今までの社会の進め方がこのまま続いていくわけではないというのは誰もが認めるところ。全ての分野で新しいことを求めていくことが重要。今回イノチャンで行ったようなイノベーションワークショップは全ての分野・教科の教育の場において、今後たくさん取り入れられ、進められていくのではないか。」

「参加してくれた高校生には、イノベーションの学びや楽しさ、その効果を他の大人や高校生に伝えていってほしい。」



最終プレゼンテーションでの質疑応答



フィードバックの様子

主催した大学生の感想

主催した大学生の本大会を終えての感想の一部をご報告いたします。

「全てを一から作り上げなければならず大変苦労しましたが、一つのイベントをどのように企画し実現させていくか学ぶことができ、非常に楽しかったです。私は主に渉外を担当し協賛企業とのやりとりを行いましたが、このような経験はそう多くできるものではなく貴重な機会だったと思います。」

「何もない状態から1年間をかけて大会を形作る過程を体験できるのは、大会初年度に大会作りに取り組んだ人の特権のようなもので、当日を迎えて一つの大会の姿を目にした時は、深く感銘を受けました。今回大会作りを通して感じたことを生かし、来年度はより良い大会にしていきたいと思います。」

「メンバーと協力し一つのイベントを決行できた経験はとても心に残るものでした。高校広報として、活動してきた経緯から、大会を開催し、多くの高校生が集まる姿を見たときは万感胸に迫る思いでした。大会を通じて得た仲間も、やり遂げた思い出もすべてが僕のかげがいのない財産になりました。」

「高校生が楽しみながら学べる大会へとスタートして実現まで至れて取り敢えず安心しました。大会本番の参加者や実行委員会の雰囲気も良く、良い大会になったと思います。私自身も高校生のチューターやクラウドファンディングへの挑戦など有意義な経験を楽しくでき、本当に素晴らしい体験であったと思います。」

「大会の設計、運営においては当然苦労もありましたが、本大会が高校生を対象にしている点で特に大きなやりがいを感じられたように思います。私たちと同様に今後の日本を担う世代でありながら、発想の柔軟さ・何でも吸収できる素直さを持ち合わせた高校生と一緒に防災のイノベーションを考えるのは純粹に楽しかったです。最終的なアイデアも高校生ならではの良さが光るものばかりで、ワークショップの設計に携わった一員として喜びもひとしおでした。」



ワークショップ中の学生アシスタント



ワークショップの様子

実行委員会の活動

実行委員会について

本大会は全国高校生社会イノベーション選手権実行委員会によって実施されました。実行委員会は東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻及び東京大学工学部社会基盤学科に所属する学生有志20名（修士課程6名、学部課程14名）により構成されています。昨年の10月に実行委員会が設立され、大会開催に向けた運営が始動しました。プロジェクト全体を統括する「運営班」、大会の経理を管理する「会計班」、大会の課題やワークショップを設計する「レギュレーション班」、高校やメディアへの広報を行う「広報班」、大会スポンサーを募る「協賛班」、審査員への依頼や対応を行う「審査員班」、ポスターやホームページをはじめとしたデザインを行う「デザイン班」などの部署が設置され、各部署が互いに連携をとりながらイノチャンの設計を行いました。第一回大会ということで学生らにとっても初の試みであったイノチャンですが、学科の教員や共催団体の関係者、その他大学内外様々な方からの助言や支援を得て、第一回大会を開催することができました。



実行委員会のメンバーと大会プロデューサー

実行委員名簿

代表	西條圭祐 (学部 4 年)
副代表	中島浩徳 (修士 2 年)
修士 2 年	瀧澤知樹 彭思雄 伊藤佑馬
修士 1 年	浅野太郎 水野弘一
学部 4 年	青山美和 赤坂諒 飯田晃弘 高橋亨明 丹羽勇人 舟橋壮真 古川智也 若尾昌輝
学部 3 年	奥田喬一 齋藤悠宇 中村遼斗 野田智也 横山大智

運営構造

主催 東京大学大学院工学系研究科 社会基盤学専攻		共催 (一社) アイスクール (一社) 日本社会イノベーションセンター	
実行委員会		理事会	
運営班 会計班 レギュレーション班 広報班 協賛班 審査員班 デザイン班		社会基盤学専攻長 羽藤英二 大会プロデューサー 小松崎俊作	i.school エグゼクティブ・ディレクター / 日本社会イノベーションセンター代表理事 堀井秀之

各部署の活動内容について

●運営班（西條・浅野・若尾・水野・青山）

当日運営班は本大会の二日間の準備を行いました。具体的には、タイムスケジュールの作成、備品の準備や会場の設営、スタッフの仕事の分担等を行いました。本大会で生じうるあらゆる事態を想定し対策を行いつつ、参加していただく高校生や先生方はもちろんのこと、学生スタッフや審査員、見学者を含むすべての方が、不安なく楽しんでいただけるように尽力いたしました。

●会計班（青山・赤坂）

会計班は大会資金の管理を行いました。共催団体である（一社）日本社会イノベーションセンター（JSIC）に振り込まれる企業協賛金の管理をしたり、イノチャン団体口座に振り込まれるクラウドファンディングのお金を管理したりするとともに、大会予算の作成と実際にかかった経費の集計を行いました。来年度の予算戦略を鑑みつつ、適切な規模で大会を開催できるよう努力しました。また、イノチャンの会計業務において、JSIC 経理の荻原恵子様にご指導いただき、多大なるお力添えを賜りましたこと厚く感謝申し上げます

●レギュレーション班（瀧澤・彭・中島・伊藤・西條・青山）

レギュレーション班は大会ワークショップの設計と当日のインストラクションを担当しました。テーマは高校生に関心の高い社会課題を特定すべく高校生にアンケートを取り、防災に致しました。防災の中でも、高校生が身近に考えることができ、またアイデアとして社会に影響を与えうる「防災の日用品」というテーマに絞りました。ここでは既存の防災グッズは引き出しや押入れの奥にしまわれてしまい、また使い方がわからず、いざ災害時に使うことができない、という課題を取り上げています。この課題を解決するのは防災グッズを日用的に使うことだという理念のもとワークショップを設計致しました。設計に当たっては、災害に詳しい目黒研修士の伊藤に協力を仰ぎ、西條や青山をメンバーとして加え多数のアイデアを出して貰い、社会基盤学科で災害に詳しい池内先生やワークショップ設計に詳しい堀井先生に意見を伺い、より社会にインパクトを持ちかつより高校生がアイデアを楽しく考えられるワークショップを目指しました。高校生がしっかりアイデアを考えられそうか検証するため、三回の模擬ワークショップを行い、ファシリテーションや設計へのフィードバックを得ました。当日は中島がワークショップのファシリテーションを行い、良い全国高校生社会イノベーション選手権がつくれたのではないかと思います。

● 広報班（古川・飯田・青山・西條・野田）

広報班は高校やメディアを通じての広報を行いました。高校に向けては、参加高校を募り、また高校側との窓口としての役割を担いました。具体的には、高校への連絡・高校からの質疑に対する受け答え・電話・メールを通じた高校側へのPRを行いました。できるだけ多くの高校に参加してもらえることと同時に、参加・非参加にかかわらずより多くの高校に全国高校生社会イノベーション選手権の良さを理解してもらえるよう尽力いたしました。報道に関しましては国土交通省、そして文部科学省の記者クラブに伺い、プレスリリースを行い私たちの活動、試みを多くの人々に伝聞しようと思いました。実際に教育新聞社の方に記事にいただき多くの若い方にイノベーション教育の必要性を伝えることができたと思います。

● 協賛班（青山・西條・赤坂・丹羽・高橋）

協賛班は企業協賛とクラウドファンディングにより大会資金集めを行いました。企業協賛では、協賛していただく企業様にご挨拶に伺い、協賛決定後メールのやりとりや請求書の作成を行いました。クラウドファンディングでは、その準備や広報を行いました。5つの企業様から協賛をいただき、クラウドファンディングでは29名の方にご支援いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

● 審査員班（奥田・横山）

審査員班は本大会での高校生のアイデアやワークショッププロセス、プレゼンテーションを評価していただく審査員の方々への対応を担当いたしました。審査員の選定から始まり、メールや訪問を通しての依頼、そして当日の対応までを行いました。今大会では、テーマである「防災」およびイノチャンの主目的である「イノベーション教育」をキーワードとして、それぞれの分野の第一線で活躍されている専門家の方々にご協力いただきました。本報告書に後述いたしますように、入江さやか様、新屋千樹様、堀井秀之様をお招きし、小松崎俊作大会プロデューサーを加えた計4名の方に審査員を務めていただきました。厚く御礼申し上げます。

● デザイン班（舟橋・齋藤・中村）

デザイン班は、広報に用いたフライヤーやホームページ、および当日資料であるパンフレットの制作を行いました。高校生に向けてのイノベーション教育という世界観を表現できるようなデザインを心がけました。また、大会ロゴに関しましては東京大学大学院総合文化研究科の物井愛子様にご依頼いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

来年度の開催について

イノチャンの成果

イノチャンを通して高校生たちは自分たちで新たなアイデアを創出することを体験しました。その中で様々な壁にぶつかっていたと思います。日用品として使用してもらえるか、新規性があるのか、それは本当に役に立つのか、といったようなアイデアの創出の難しさを感じたと思います。それと同時に高校生は苦労しながらも楽しそうに話し合い、アイデア創出の楽しさと奥深さを感じていました。また他の高校生との交流、他の高校の発表を聞き、高校生それぞれが様々な価値観に触れ合い、単一の価値観にとらわれない重要性を感じてもらえたことでしょうか。参加していただいた高校生たちの社会に対する貢献を期待しております。

来年度の開催に向けて

イノチャンの本大会において各チームに1人ずつアシスタントをおき、チームの中での話し合いを報告してもらっていたのですが、どのチームも最初は既成概念にとらわれておりました。しかし本大会の最後には新規性のあるアイデアの創出に成功し、私たち自身も驚くようなアイデアが多くありました。また急成長する高校生を身近で見て、高校生にとってイノベーション教育の大切さを感じました。今後もこのイノチャンという大会を続けていければと思います。当大会を実施することができたのは、協賛していただきました企業の皆様、そしてクラウドファンディングをしていただきました皆様のおかげでございます。今後とも全国高校生社会イノベーション選手権をよろしくお願いいたします。

企画協力

羽藤英二 教授 池内幸司 教授 小澤一雅 教授 加藤浩徳 教授 古関潤一 教授 中井祐 教授
本田利器 教授 目黒公郎 教授 知花武佳 准教授 沼田宗純 准教授 森川想 助教

Special Thanks

赤池あゆこ 様 物井愛子 様 荻原恵子 様

最後に

平成 30 年 8 月 18 日、19 日に記念すべき第一回全国高校生社会イノベーション選手権が開催されました。

イノチャンに参加してくださった高校生の皆様には、実際にワークショップを経験することによりイノベーションを起こす楽しさと難しさを学び、また、防災という社会基盤を考えるうえで欠かせないテーマに関して理解を深めていただけたと思います。イノチャンに参加した高校生の皆様が、この大会で得た学びを持ち帰り、次は自分達の地域にてイノベーションの担い手となって活躍してくださることを願ってやみません。

この大会は、多くのご支援を賜りまして開催を実現することができました。第一回大会と実績がないにもかかわらず、ジェットエイト株式会社様、株式会社大林組様、鹿島建設株式会社様、大成建設株式会社様、清水建設株式会社様におきましては、ご協賛をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。そして、我々学生の可能性を信じ、クラウドファンディングを通じてご支援いただいた皆様、誠にありがとうございます。ご協賛、ならびにクラウドファンディングのご支援をなくして、このように大規模な大会を運営・実行することは不可能であったと確信しております。

また、全国各地からお集まりいただいた高校生の皆様、ならびに引率していただきました先生方、この度はイノチャンに興味を持ち参加していただきありがとうございます。大会が開会するにあたり、会場いただいた皆様で埋め尽くされた、活気溢れる会場を目の当たりにした時の喜びは今でも忘れることができません。至らぬ点多々あったことと存じますが、最後まで楽しんでいただけましたら幸いです。

入江さやか様、新屋千樹様をはじめとした審査員の皆様には最後まで大会を支えていただきました。高校生に多くのフィードバックをしていただいたのみならず、私たちにも大会運営に関するアドバイスや防災に関する様々な知識をご教示いただきました。私たち実行委員会にとっても大変学び多き大会となりました。

改めまして、実行委員会メンバー一同、開催にあたり多くの方々に支えていただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

実行委員会代表

西條 圭祐

